

## 1. はじめに

私どもの研究所が資料保存について意識し、少しずつ取り組みをはじめたのは1990年ころに遡る。このころは研究所の内外で資料保存をめぐる環境が大きく動いた時でもあった。

研究所は法政大学の多摩キャンパスへの一部移転にともない、1986年に手狭な市ヶ谷キャンパスから広大な多摩キャンパスへと移転した。これにより十分な書庫・閲覧スペースを得て、ライブラリー活動をこれまでに増してより公開性を高め、充実させるべく新たなとりくみを始めたころで、利用と保存との調整がより現実的な課題となっていた。

一方、研究所の外では、社会的なインパクトを与えた金谷博雄さんによる『本を残す—用紙の酸性問題』（1982年）の刊行から数年を経て、ようやく図書館界に資料保存に対する関心・機運が高まったころでもある。国立国会図書館に資料保存対策室設置、木部徹『CAP：本の保存のための海外ニュース』（1986年）、東京修復保存センター開設（1988年）、日本図書館協会資料保存委員会設置（1990年）と、めまぐるしく展開した。中心におられた方々の努力の賜たまであったろう。

研究所では先進的に繰り広げられた取り組み、調査、実践、発言に学びながら、ささやかながらの取り組みを行ってきた。

## 2. 目標の気づき——「利用のための資料保存」 「保存ニーズの把握」

そのころ日図協資料保存委員会から提起された「利用のための資料保存」という考え方は、私にとってまさに「目からうろこ」というほどのインパクトがあった。ただ書庫の奥にしまいこんでおくだけならばそれほど悩むことはない。公開の資料保存機関にあっては、利用と保存の狭間でいつ

も悩む。劣化している資料に触れると、できるならば書庫の奥にしまいこんでおきたい。しかし、研究所の所蔵資料はすでに歴史史料として社会的存在でもある。活用されてこそその存在意義がある。研究者や多様なユーザーにひろく公開しているというスタンスをとっている研究所ライブラリー・アーカイブに身を置く私にとって、「利用のための資料保存」という考え方は、書庫管理や媒体変換、廃棄なども含むトータルな資料管理の一環としての資料保存の位置を明確に示してくれた。

もうひとつのキーワードは「保存ニーズの把握」である。資料がどうしてほしいと欲しているかをきちんと知る。資料の状態、利用ニーズなどをトータルに把握することで資料ごとに対処方針が導かれるということである。保存技術、予算も重要なファクターとなる。これをわかりやすく定式化してくれたのは、様々な資料保存に関する発言、情報提供を勢力的に行い、ついには会社まで作ってしまった木部徹さんであった。

大原社会問題研究所が資料保存に関心を向ける理由は、近現代の紙資料の劣化への対応に迫られたことによる。研究所には世界に一点しか存在しない資料が多くある。図書、小冊子、ビラ、チラシ、ポスター、写真などさまざまな紙資料、さらに、バッジや旗などの現物、映像、音声など様々な形態の資料がある。いわゆる文化財のような貴重資料ではない。今から100年も遡らない近現代の社会運動を語る生資料である。私たちの父母、祖父母、曾祖父母たちが、日本の近代化、工業化、高度成長に抗し、人々の暮らしと権利を守り、獲得するために闘った組合運動、農民運動、政治運動の記録である。それらの多く、とりわけ戦前期のものは、権力による弾圧、規制、あるいは運動の衰退とともに処分されたことだろう。太平洋戦争の戦火は丸ごと資料を灰にした。没後に遺族に

より処分された資料も多いことだろう。

今研究所の書庫にあるのはそうしたさまざまな困難を幸いにしてぐり抜け、研究所にたどり着いてきた資料群である。しかし、研究所にとってはりっぱな「お宝資料」である。できるだけ長く、将来にわたっていい状態で保存していきたい。同時に死蔵することなく、ひろくユーザーの多様なニーズに応じて利用に供していきたい。それが資料を作り、収集し、保全してきた先人たちへの責務である。そういった研究所のスタンスが「利用のための資料保存」「保存ニーズの把握」という考え方とぴったり一致した。資料保存は研究所ライブラリー業務の重要な一分野であると同時に、研究所の歴史・存在意義そのものと深く関わるテーマであった。

### 3. 研究所の歴史とその資料

法政大学大原社会問題研究所の歴史は大正8(1919)年に遡る。今から89年前のことである。岡山県倉敷市の富豪大原孫三郎により大阪・天王寺に創立された。企業の社長が私財を投じて社会・労働問題の研究所を創ったのである。今時からするとちょっと考えにくいことであるが、孫三郎は桁はずれで異色の実業家であった。彼は倉敷紡績などの事業を営むかわら、農業研究所、病院、労働科学研究所、美術館などを設立した。しかも驚くことには、それらがみな今日も現役として活動していることである。城山三郎が書いた孫三郎の伝記の書名は『わしの目は10年先が見える』であったが、10年どころか100年先まで見通していたといえよう。

彼は岡山孤児院の創設者石井十次の影響を受けキリスト教徒となり、石井の事業を経済的に支え、その死後は石井記念愛染園を大阪に設けるなど社会事業に熱心であった。しかし慈善事業の限界に失望し、社会問題の解決には根本的な調査研究が必要であると考え、研究所の創設を決意した。初代の所長に当時の東京帝国大学経済学部教授高野岩三郎を迎え、彼の元に櫛田民蔵、権田保之助など新進のすぐれた研究者たちが集った。そして孫

三郎は研究所の経営を高野に任せ、一貫して、口をはさむことはなかったのである。

高野は実証的な研究スタイルで図書資料を重視するリベラルな研究者であった。研究所創立の翌年に早くも『日本労働年鑑』を創刊する。年鑑の編集や研究活動のために国内で社会・労働問題の大量の図書資料が集められただけでなく、ドイツ、イギリスに研究員を派遣し、膨大な社会運動関係の図書・資料を購入した。こうして収集した図書・資料を研究員の研究目的だけでなく、広く一般に利用公開した。1924年のことである。図書館史をひもとくと、研究所ライブラリーは府立図書館と並ぶ学術図書館として当時の大阪府民に利用されていたことがうかがえる。

こうして、ライブラリー活動は研究所活動の重要な柱にすえられることとなる。話は少しそれるが、高野は自ら研究所の図書館の経営に深く関わるだけではなく、生涯を通して図書館に深い関わりを持っている。大原社会問題研究所に移る前の東大の院生時代1900年に文部省派遣でドイツに留学した際「エンゲルの法則」で有名なエンゲルの旧蔵書が売りに出される場面に立ち会い、当時の指導教員と早速に連絡をとり購入している。このエンゲル文庫が中核となって東大に経済統計研究室が設置され、これが後に経済学部の母体となる。1940年には内閣統計局に中央統計図書館の設置を訴え、また、戦後1946年には戦前からの研究員大内兵衛らとともに議会図書館設置の請願を行うなど図書館の充実発展を訴える社会的発言を繰り返している。

1937年に大原氏からの財政援助がうち切られた後、研究所は土地、建物、蔵書約8万冊を大阪府に売却し、東京に移転する。その後、戦後まで冬の時代が続く。そして1949年に法政大学と合併し、現在の法政大学大原社会問題研究所となる。組織の母体は変わったが名称と活動スタイルは基本的に継承され、今日に至っている。

研究所の所蔵資料の来歴を理解してもらうためであったが、いささか戦前期の研究所の歴史に立ち入りすぎたかもしれない。

現在、研究所では資料類の管理を戦前期と戦後期にわけて行っている。戦前期と戦後期の違いは、戦前期——①量が少ない、②社会運動全般、③寄贈もあるが多くは購入、戦後期——①量が多い、②労働運動が中心、③ほとんどが寄贈、といったところが特徴であろうか。研究領域としては、社会科学系の研究所として我が国最古の歴史をもち、社会問題全般に亘る新進気鋭の研究者が集った戦前期に比べれば、戦後は類似の研究機関が相次いで多数設立されたこともあって、研究スケール、スタッフとも戦前期と比してやや見劣りするのを否めない。

### 3. 保存のとりくみ

それでは、資料保存に関わって行ってきたことを以下具体的に述べたい。

#### (1) 調査と計画

資料の保管環境や劣化状況の現状把握であるが、1990年に木部徹さんの設立した有限会社キャット(現「資料保存器財」)に「蔵書の保存状況についての診断」を依頼し、報告・提案を受けた。また、1991年には国文学研究資料館の安藤正人さんらによる文部省科学研究費による「紙資料の劣化状況調査」に協力した。

小規模の研究所にあって日常業務を抱える中で、こうした調査にはなかなか取り組めない。専門的な知見を有する第三者に客観的に見ていただくことに意味があった。同時に、予算要求の際の根拠資料として活用することも目的のひとつであった。

これらの調査・提案をふまえて研究所で短中長期の資料保存計画を立案した。現在も基本的にはこの時の計画に基づいてすすめているといっている。

#### (2) 保管環境の整備

①所内各所に温湿度計を置き半年程度調査をし、その結果を踏まえて一定の改善をした。

②貴重書庫・戦前期資料書庫の蛍光灯を紫外線除去のものに取り替えた

③マイクロフィルム収納庫を昼間日照のあると

ころから書庫に移動した

④整理用品に中性紙を使用開始した。

⑤研究所刊行物を中性紙に切り替えた

などが主なことである。通常の蛍光灯は施設関係の予算から支出されているが紫外線除去のものは特別な事務用品ということで研究所予算から支出しなければいけなかった。全部を取り替えたかったが貴重書庫と戦前期史料を配架している書庫に限定している。通常の書庫も、ふだんはできるだけ不要な照明は点けないようにしている。利用頻度の比較的少ない研究図書館だからできることだろう。

書庫の空調でいうと、よくいわれたのは冬場の暖房のし過ぎによる過乾燥である。冬季長く書庫にいと、鼻が乾くという経験があった。しばらく書庫の温湿度を計測したところ、たしかに温度の上昇と湿度の低下は相関があった。人間の鼻同様書庫の本も水分を発散していたわけである。「本と人はいっしょなのだ」と実感した経験であった。

#### (3) 保護・脱酸・修復

##### ①容器入れ、修復

90年ころから、劣化した図書や貴重書を取りあえず容器に入れ保護することが多くの図書館、資料保存機関で行われるようになった。私どもでも、研究所創立直後にヨーロッパで収集した古典籍のうち、サイン入り本や初版本などを中性紙の容器を作成して容れた。容器の作り方はキャットの方を講師に迎えて教わり、所内で臨時職員の方にやっていただいた。主な貴重図書はすでに容れ終わり、今は閲覧対応や受け入れの都度、表紙と本体がはずれかけているような本や資料を随時容れている。もともと、最近では箱ではなく安直に封筒に入れることが多い。時に製本に出すこともある。

容器入れの際に本の状態の簡単な記録を残し、劣化の激しい図書など数点はキャットに修復を依頼した。私どもでのお宝度No.1のマルクスのサイン入り『資本論』初版本は、表紙がはずれていたが、年に1、2度の展示会の出品に耐えるように修復してほしいと依頼したものである。

## ②脱酸・修復処理

ポスター・ステッカーについては、全点フィルム・エンキャプシュレーションを行った。要するに、透明のフィルムの袋に入れただけである。その際、戦前期のものについては業者にチェックしていただき、劣化していたものについて脱酸と補修を行った。戦後占領期のものは紙の状態がよくなかったのではほぼ全点脱酸処理した。

ここ数年は、これまで直筆のノート、原稿など修復技術の進化、商業化の状況を見ながら見送っていたものについて、利用ニーズの高い資料から業者（東京修復保存センター）に依頼し、順次脱酸・修復を行っている。「堺利彦旧蔵『日本社会主義同盟名簿』」、「片山潜原稿『在露三年』」、「高野岩三郎『日本共和国憲法私案要綱』・『日記』」、「新ライン新聞最終号』、『経済学研究』創刊号（森戸辰男「クロポトキンの社会思想の研究」掲載）などである。これらの資料は、研究者の利用と共に、外部機関で行われる展示会やマスコミ等で比較的良好に利用されているものである。今後も利用ニーズをみながら優先順を決め、処理していく予定である。

## （4）媒体変換

紙はいずれ塵になる。その前に資料的価値のあるものについては内容をほかの媒体に写す必要がある。また、そのままでは利用しにくいものについて、ニーズにあわせ利用しやすい媒体に移し替えることが望ましい。これまで対応した主なものは、以下のとおりである。

### ①オープンリールの音声テープをカセットテープ・CDに変換

聞き取り調査や講演会などの録音テープでオープンリールのもをカセットテープに移し替えた。鈴木茂三郎文庫の演説会等の録音テープはその後の技術の進展をふまえて試しにMP3形式でCD化した。まあ具合はいいようである。先にカセット化したものは、いずれさらにCD化する必要が出てくるのだろうか。技術の進展は歓迎であるが、それを追っていくのもなかなかしんどい。

新たに収集した国民文化会議資料にも社会運動家の演説テープなど、かなりの量の音声資料（オープンリールのテープ、カセットテープ）がある。どうしたものかと思案中である。

### ②映画フィルムをビデオに変換

戦前期の労働争議の実写フィルム、松川事件等の映像フィルムを利用しやすいビデオに変換した。カセットテープもそうであるが、いずれビデオも使えなくなってくるのだろうか。

### ③アナログコピーの作成

戦前期の資料ファイルに収めてあった書簡（といっても私信ではなく機関文書が大半であるが）は、コピーをとり、ファイルに閲覧用として戻し、現物は中性紙にはさんで別に書簡専用のキャビネットに差出人の氏名順に収納した。

また、現在継続して行っていることは、占領期に活動した労働組合の中央組織「産別会議」の本部資料である。会議資料、通達、ビラ等の紙資料がファイル化されている。占領期の紙事情を反映して紙質が悪く劣化しているので、閲覧・コピーの都度気を使うコレクションである。占領期の歴史研究に欠かせない基本資料であることから、利用頻度は比較的多い。数年前にマイクロ化の予算要求をしたが認められず、デジカメ撮影も検討したが、結局アナログコピーしている。最終的には、閲覧用にはコピーを利用してもらい、現物は段ボール詰めし、記載の確認や撮影、展示など現物の必要な場合のみ利用することになるだろう。

ほかにも、利用頻度の高いもので劣化した紙資料類については閲覧・コピー請求の際にその後の閲覧用にもう1部余分に作成することは時々ある。アナログコピーは、手間、コスト、その後の利便性などを考えあわせると、意外といいのではないかと思っているがどうだろうか。

### ④マイクロ化

戦前期の機関誌類はかつて独自にマイクロ化した。閲覧用にはマイクロフィルムから紙出力したものを主に利用に供している。

近年は独自でのマイクロ化は行っていないが、出版社により協調会資料がマイクロ化され、市販

されている。出版社と協議の上刊行後数年を経てマイクロフィルムから pdf ファイルを作成し、文書そのものをホームページで公開している。資料現物、マイクロ、web-site と三通りのアクセスが可能となっている。

一方、所蔵しているマイクロフィルムの劣化問題が検討事項となっている。業者に抽出調査をやっていただいたところ、古い TAC ベース（支持体の材質がトリアセート）のフィルムに加水分解が見られるとの診断であった。対処としては PET ベース（支持体の材質がポリエステル）のコピー作成、容器交換が必要とのことである。多額の費用を要することもわかり、コストと利用ニーズを見ながら対応を検討しているところである。

#### ⑤資料の復刻

これも媒体変換のひとつの方法であるが、研究所の所蔵資料を公開することは、意義有ることとして、研究所の重点的事業としてかねてより位置づけられている。なかでも 1960 年より開始した戦前期の資料・機関誌類の復刻「日本社会運動史料」は、これまで 29 点、212 冊を刊行した。1991 年からは戦後期の復刻事業「戦後社会運動資料」を開始している。この他にも協調会資料の復刻、マイクロ化出版、戦前期の『大原社会問題研究所雑誌』の刊行などを行っている。研究所の独自企画の場合もあれば、出版社からの持ち込み企画もある。いずれにせよ、研究所の所蔵資料が学術研究のために公開されることは、研究所にとって大変うれしいことである。出版事業は研究所の収入の増にもつながる。今後とも出版社との協力連携を強めていきたい。

#### ⑥デジタル化

ポスターの全点、戦前期の写真の一部についてはデジタル化し、ネットで公開している。資料の保存というよりは、検索、利用対応が主目的である。協調会資料はマイクロフィルムからデジタル化を行った。

### 3. 検討課題など

以上、研究所として資料保存に関して取り組ん

できたことを概観してきた。そのほとんどが、さほどの予算を必要とするわけではない。というより小規模の研究所ゆえに予算規模は元々少額である。その中でやりくりしつつ、資料の保存ニーズに応えながら少しずつ、できるところから手がけてきていることである。最後の章では全般的なこと、今後の検討課題などを述べてみたい。

#### (1) 収集、整理、利用、保存——トータルな資料管理で

容器入れ、脱酸・修復や媒体変換など資料保存に係る処理は考え方としてはそれ自体単独で行われることはない。資料を収集し、整理し、検索手段を整え、利用ニーズに応えるというトータルな流れの中でどのような保存技術を適用するかが検討される。当然のことながら、スタッフ、予算措置や書庫スペースにも制約される。

ポスターでいえば、研究所が戦前期より収集し、保存してきたが、一定のスペースを得て利用可能な状態で収納できるようになり、検索手段としてのカードが作成された。利用する際にはカードを検索し、現物にあたる。ポスターに直に手で触れるとうっかりすると紙そのものを傷めかねない。そこで透明のフィルム（袋）に容れた。これにより扱う際の負担が格段に減った。さらにデジタル化し、ホームページで公開したことで、現物に触れる機会をより少なくできた。研究者、出版者などからの求めによりデータを提供する際は画像ファイルをそのままメール添付で送ればことが足りる。脱酸修復したことにより資料の寿命を長持ちできる。ユーザーにやさしくなり、スタッフの手間も大いに省けるようになったものである。

もうひとつ例をあげよう。占領期の労働組合産別会議資料のアナログコピー作成である。研究所所蔵の資料類については、インデックスシリーズと銘打ってファイル単位でリストし、ホームページで公開している。産別会議資料もまず「産別会議資料インデックス」として公開した。媒体変換の方法としてマイクロ化、デジタル化も検討したが、前者は予算措置がかなわなくまずあきらめ、手間の問題と利用のしやすさを考え、結局アナロ

グコピーの方法を選択した。研究所の利用者は筆比較的高齢者が多いことから、アナログベースの方が利便性があることも理由としてあった。利用のあったファイルをまず優先し、手の空きをみながら順にコピーを作成している。

古典籍の容器容れ、記録化、修復という一連の流れも、トータルな資料管理と理解している。

#### (2) 保存技術の進歩、保存資材の多様化

最近では保存関連の事務用品の種類は格段に増え、購入しやすくなっている。資料保存に関わる業務は他の業務に増して業界の動向に関心を向ける必要がある分野といえる。保存修復の技術や資材に関わる業者、マイクロ業者など、ほかにも図書館や博物館の動向にも注意を向けたい。より多くの情報が適切にインプットされることで望ましい処理につながるからである。保存に関する様々な情報がひろく公開され、共有される場があることが、私どものような小規模の研究所にはとてもありがたい。関連業界のサイトの充実ぶりが目立つが、日図協や国会図書館に期待したいところである。

#### (3) 所内での意志統一、組織の上層部や他部局との関わり

資料保存の仕事を円滑にすすめていく上で、業界の動向の把握とともに上層部の理解や他部局とのコミュニケーションはほかの業務に増してより重要となる。

所内にあっては日常業務がどうしても優先し、資料保存に関することはあとまわしになりがちであろう。それは私どもでも同様である。それでも、研究所はライブラリー業務が活動の柱のひとつとして位置付けられていること、組織規模が小さく、かつ、研究員と職員が同じテーブルで議論し意志統一する場があることで、予算、スタッフその他環境の制約の中ではあるが、取り組みのフットワークを軽くしている。

所内レベルで解決ができない予算措置をとることもや施設整備に関わることでは、大学上層部、施設・財政担当部局の理解がないとすまない。たとえば、「なぜ高い中性紙が必要なのか、再生紙ではだめなのか、換えると具体的にどういうメリ

ットがあるのか」といったことに的確に具体的に応える必要がある。時に、資料の提出も求められる。初期のころはけっこうやりとりがあり、負担に感じたことも再々である。しかし、担当者がはんこをおしてくれないことには仕事は先にすまない。納得していただくにはこちらもそれなりに勉強してかからなければならない。研究所の存在意義と資料保存の理解者を広げていくひとつの試練の場として、根気よく話してきたものである。昨今は業務の流れがそれなりにルーティン化してきたこと、対応するスタッフのアウトソース化がすすんできていることからビジネスライクな対応になってきている傾向があり、少し寂しく感じるときもある。

資料の保管環境でいえば、書庫の空調、換気、水回りなども日常的に業者や施設管理の担当者とのコミュニケーションに心がけ把握しておきたい。つい業者まかせになりがちなことである。

#### (4) 「収集」しなければ「保存」もない

自明のことであるが、ともかく収集しないことには保存もない。私どもでは収集する以上は原則永久保存を前提とする。ところがその収集のところで書庫のスペース問題がネックとなっている。20年前の移転時には広大だった書庫も今は段ボールの山で、ご多聞にもれず書庫はほぼ満杯である。現在、幸いにして、固定書架を集密書架に変更する年次計画のさなかにある。予定どおりいけば、数年後には書庫はすべて集密書架となる。固定書架と比べれば使いづらくなるが、収容スペースを考えればいたしかたのない選択である。通常の図書と比べ、資料類の場合はとりわけ資料管理に占めるスペースの比重は大きい。完了後はルーティンで収集している図書・資料について10～15年程度先の増加分に対応できることになるだろう。もっとも大規模のコレクションをいくつか受けようものなら数年も持たないが、時々コレクションの寄贈話が持ち込まれると、所内会議で個別に検討することになるが、図書は原則として「ノーサンキュー」、ユニークな資料類に限定して受け入れ

ることになっている。それでも、労働資料のアーカイブとして資料収集の門戸は常に開けておきたい。

労働関係の資料保存機関では、社会・労働関係資料センター連絡協議会（労働資料協）というネットワークをつくっている。それぞれの機関で不要図書を処分するさいに相互に交換しあったり、まとまったコレクションの寄贈情報、処分情報については情報交換をしながら、できるだけ受け入れ可能な機関を探し、労働関係資料の散逸を防ぐ、といったことを行っている。実際に加盟機関からの情報を元に、ある労働組合本部資料の散逸を直前に防いだこともある。研究所に寄贈の申し出があったコレクションについて、スペース、収集方針から受け入れ難いと判断した資料を加盟機関に紹介したことも何度かある。

労働組合の組織再編による資料の廃棄処分はひところの山は越えたが、資料室の狭隘化による寄贈のお話は後を絶たない。また、社会運動家や研究者の現役引退に伴う蔵書の処分もよくある。運動の過程で生み出される資料を組織や遺族が持ちきれなくなってきた。大量の社会運動の資料は最終的にどこでどのように保全されるのだろうか。「組織の資料はその組織の責任で」「個人の資料は個人で」というのはたやすい。しかし公的な機関や大学の資料保存機関がそれらをすべて負いきれるものでもない。電子化がすべて解決できるとも思えない。研究所活動全体のミッションの中でライブラリーも存在する。資料の社会的価値を過度に重視した、単なる「資料受け入れ倉庫」では所内・学内の理解を得られない。

さらに、蔵書は限りなく増大する一方で、管理・運用するスタッフは削減傾向にある。今後は、機関にあってはこれまでに増して資料・蔵書の質が問われる時代となってこよう。また資料を媒介とした機関、個人を越える社会的ネットワークづくり、資料情報の共有がより重要となってくるだろう。労働分野でそうした役割の一翼が果たせるよう微力ながら努力していきたいと考えている。

<参考文献>

- 1) 安江明夫、木部徹、原田淳夫編著『図書館と資料保存—酸性紙問題からの10年の歩み』 雄松堂出版、1995
- 2) 『大原社会問題研究所五十年史』 法政大学大原社会問題研究所 1970
- 3) 大島清著『高野岩三郎伝』 岩波書店、1968
- 4) 『中之島百年』 大阪府立図書館、2004
- 5) 相沢元子、木部徹、佐藤祐一著『容器に入れる』 日本図書館協会、1991
- 6) 法政大学大原社会問題研究所の URL : <http://oisr.org>